

伝統的な水辺空間における眺望及びアクセスのデザイン原則に関する研究*

A study on design principles on the landscape and the access to the waterfront areas in Edo Era

上島顯司**, 善見政和***

by Kenji UESHIMA, Masakazu YOSHIMI

1. 研究の背景

ウォーターフロント開発により、全国各地に、人々が集まる明るく賑やかな水辺が創出された。それらは、確かに、新たな水辺の姿を見せてくれたが、我々は、水辺が本来持つ豊かさを享受できたであろうか。均質的な空間整備となりがちで、水辺という場所の特性を十分に生かした整備事例は少なかったのではないだろうか。

現在の水辺の整備は open to public という設計思想のもとに行われているため、明るく賑やかな反面、均質的な空間を創出することにもなりかねない危険性を持っている。では、一体、どのような空間づくりをすれば良かったのだろうか。開発の熱が収まったかに見えるこの時期にこそ、水辺の空間づくりの本質が問われる必要がある。

本論文では、水辺の空間づくりの本質に近づくために、伝統的な水辺空間のデザイン・ヴォキャブラリイを発掘

し、その背後にある原理を抽出する。

伝統的な水辺空間の既往研究としては、名所図会、地図等をもとに渡辺他 1)が町と港を関連づけるための特徴を、竹内 2)が港町の空間構成の特徴を抽出している。

また、斎藤 3)は、民俗学語彙の抽出、和歌の分析を行い、海岸景観体験の類型化を行い、更に、日本人の水辺空間の認識のあり方を提示している。

一方、本研究は、

- ・ 図会や地図等の絵画情報だけでなく、地名や呼称、図会の解説文、地誌等の文献情報を用い、空間の形と言葉が複合的、一体的に結びついたものを初めてデザインの型として抽出すること。

- ・現象として確認できるデザインの型を抽出するだけでなく、それらを構成するデザイン原則を明らかにしようとする。

に特徴がある。

2. 研究の対象

伝統的な水辺とは、人々が長い時間をかけて、つきあってきた結果、その場所の持つ潜在的な意味が充分に表出していると考えられる水辺をいうことにする。具体的には、舟運が交通の主役であり、多くの名所があり、そのデザインが成熟していたと考えられる江戸期の主として都市域の水辺（海岸、港、河川、堀割運河等）を対象とし、水面との関係付けの技法である。

- ① 水際線へのアクセス
- ② 水面を対象とする眺望

に関するデザイン・ヴォキャブラリーの抽出及びデザイン原則の分析を行った。

3. 研究の方法

資料としては、名所図絵 4)、各種辞典及び地図、地誌等から 2. ①、②の水辺のデザインに関わる空間の形若しくは言語を抽出し、それぞれ古地図、地誌等による確認をし、各種辞典により最も、その語義にふさわしいと思われるヴォキャブラリーを命名した。(図-1)

例えば、水辺へのアクセスである「打出型」を例にとると、名所図会で「打出」という空間の形を抽出し、地名辞典で更に確認し、それぞれ地誌、古地図等で形や時

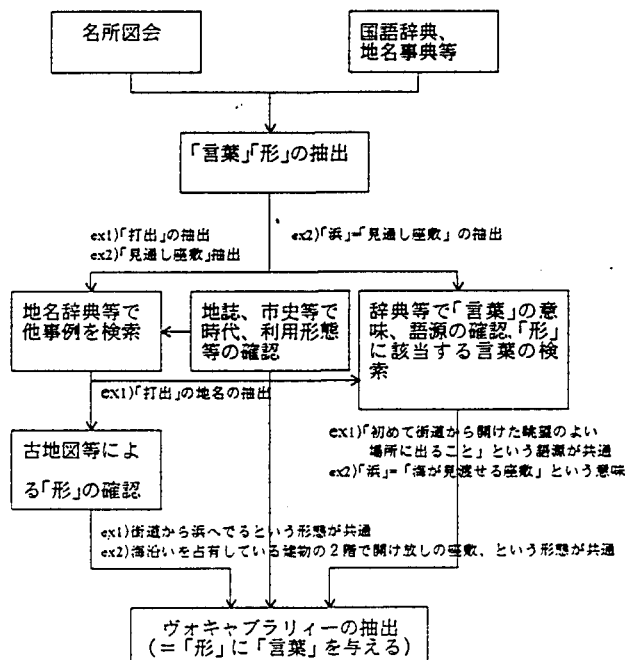


図-1 ヴォキャブ・ラリーの抽出フロー

*キ-ワード：景観、親水計画、空間整備・設計

****正會員:農修** 運輸省港灣技術研究所 計畫設計基準部
主任研究官

****正会員:工修 運輸省港湾技術研究所 計画基準研究室長**
(〒239-0826 横須賀市長瀬 3-1-1 Tel/Fax0468-44-5035)

代、利用の状況を調べ、街道から浜へ出るという形態が共通すること及び地名語源事典、国語辞典等で「街道から初めて水面への眺望の開けたところへ出る」という意味が共通することを確認した。このことから、街道での移動者による、水面の見えない場所から見通しのきく自然海浜へのアクセスを「打出型」と呼ぶことにした。

4. デザイン・ヴォキャブラリー

(1) 水辺のアクセスデザイン

アクセスのデザインについて、以下を抽出した。

a) 打出型

芦屋の打出浜（図-2）は、「陸路の山陽道が初めて海浜に打ち出たこと」からこのように呼ばれた。

このように、水面の見えない街道から見通しのきく自然海浜へのアクセスを「打出型」と呼ぶことにした。

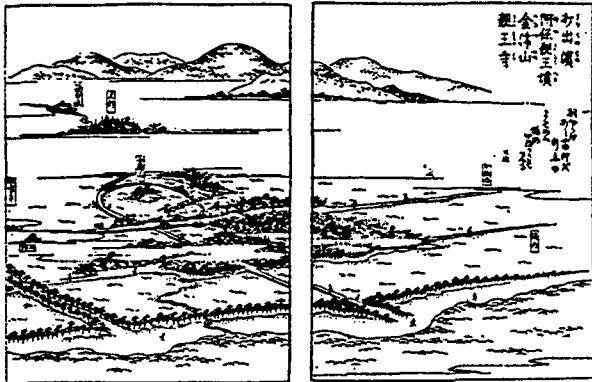


図-2 打出型（芦屋、打出浜）

b) 浜出型

網の浦蛭子社（図-3）のように、集落前面の海浜は、揚場や作業ヤードのような生産の場としてだけでなく、「浜降り」や「浜出」と呼ばれる海浜（中）渡御や集落内のレクリエーションが行われる空間であった。

ちなみに、浜出とは「浜に出てみそぎをすること」「御輿が海浜に臨幸すること」「海岸で一日遊ぶこと」をいう。

このように集落内居住者にとって多層的な意味を持つ水辺へのアクセスを「浜出型」と呼ぶことにする。

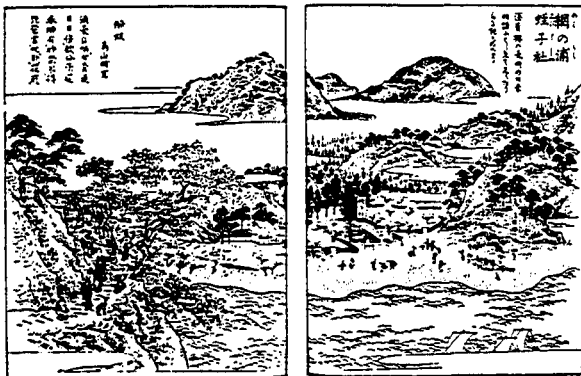


図-3 浜出型（網の浦蛭子社）

c) 突抜通り型

大津の札の辻（現在の大津駅付近）から港町である元会所町（現在の浜大津駅付近）に至る通りは「突抜通り」と呼ばれていた。突抜とは、「裏より表へ抜け通る」道のことであった。（図-4）

従って、このような内陸から海側へのアクセスを「突抜通り」型ということにする。

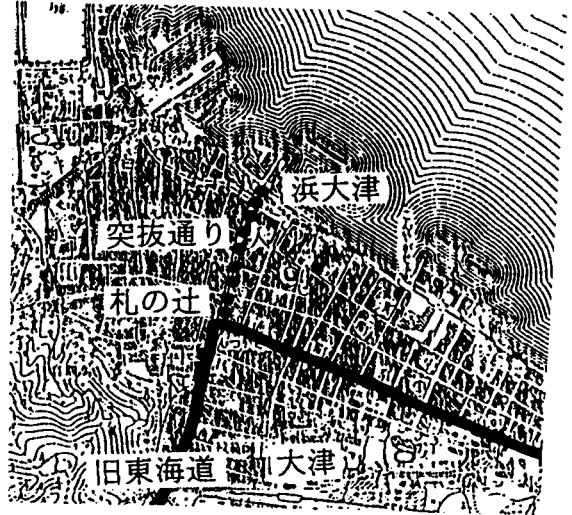


図-4 突抜通り型（大津、突抜通り）

d) 突抜河岸型

「突抜河岸」とは、町中の道が河岸（湊）に突き当たるところをさし、そこだけは、広場ようになっており、共同的な利用が行われた。（図-5）

このように内陸から渡し、河岸、波止等の湊機能のある水辺に対して垂直なアクセスを「突抜河岸型」と呼ぶことにする。

宗教軸と一致する事が多く、水面には、雁木や波止、鳥居などの装置が置かれる。

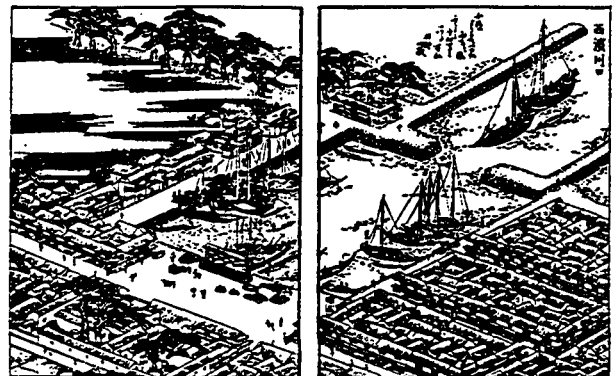


図-5 突抜河岸型（西浜川口）

d) 小路・通り庭型

江戸や大坂では、水辺に最も近く、並行な道が両側町（通りの両側が町屋）であり、水面側が占有されていることが多い。（図-6）

このような町並みにおいては、数軒毎に路地や軒の張

り出た半屋外のスリットや家屋の内部に通路を有するものが見られる。このような水辺側へのアクセスを「小路型」「通庭型」と呼ぶことにした。

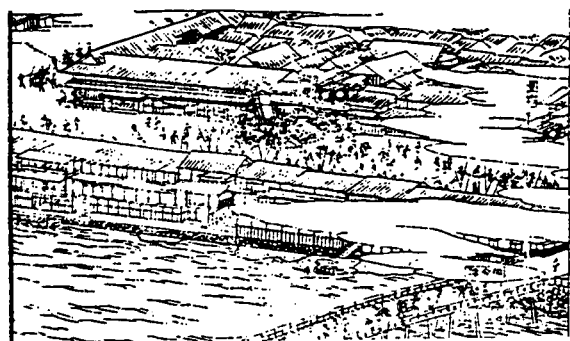


図-6 小路・通庭型 (道頓堀)

e) 坂迎型

大津石場、品川宿、高輪宿などの町はずれでは、「坂迎え」と呼ばれる旅行者の送迎が行われた。

このように、水に面する一つの集落、都市域から次の集落、都市域へのアクセスを「坂迎」型と呼ぶことにする。



図-7 坂迎型 (大津、石場)

(2) 水辺の眺望のデザイン

眺望のデザインの型について、水面との関係付けの手法等によって以下の型を抽出した。

a) 「見通し座敷型」

水辺側を占有するように立地していた高輪、品川の料亭、遊廊では二階の開け放した座敷から海が見渡せるような演出がなされていた (図-8)。このような座敷は「見通し座敷」「見通し」もしくは「浜」と呼ばれた。

このように、水辺を占有する海岸通り (両側町) の水面側に発達した、水面の眺望を楽しむ洗練された手法を「見通し座敷型」と呼ぶことにする。

b) 対潮山型

図-9には、「この山は三方ひらけて渺々たる海上を見渡し」「山路も海に向かうがゆえに」「沖をゆく船」「皆この山の風景にして」とある。

江戸の御殿山や各地の日和山のように、水辺に面して立地し、水面と対峙し、水面の風景を我がものにできる

山からの眺めを「対潮山型」と呼ぶことにする。

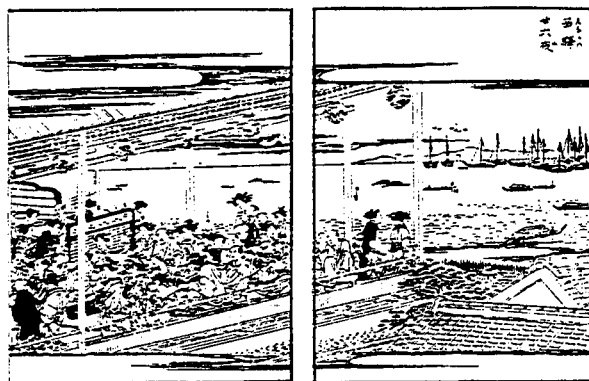


図-8 見通し座敷型 (品川)

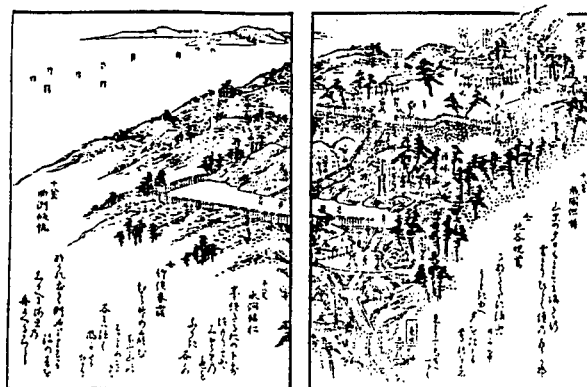


図-9 対潮山型 (琴弾宮)

c) 潮見坂型

江戸の汐見坂 (図-10) のように、自然の微地形による見切りを利用して水面への眺望を楽しむことを「潮見坂型」と呼ぶことにする。

d) 対潮楼型

町中において、水面に対する眺望を周辺と差別化することにより、水面への眺めが強調されるように作られた楼を「対潮楼型」と呼ぶことにする。

e) 「淀看の席」型

京都黒谷の茶室「淀看の席」は茶室の下地窓から淀川が絵のように見えたという。このように遠方であっても、構造物、植栽などの人為による「見切り」



図-10 潮見坂型 (三田)

f) 潮見峠型

水面が望めない地点から初めて水面が望めるようになる地点が潮見峠である。潮見峠 (図-11) の多くは、

眺望を楽しむための茶店などが置かれ名所となっていた。このように、水面の不可視領域から初めて河岸領域に変化する地点からの眺めを楽しむことを「潮見峠型」と呼ぶ*1) (図- 11)。

g) 望海山型

内陸の山の山頂から海面への眺望を楽しむものを「望海山型」と呼ぶことにする。(図- 12)

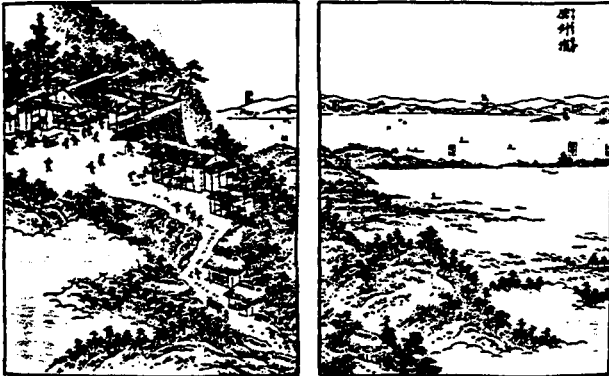


図- 11 潮見峠型 (薩針嶺)

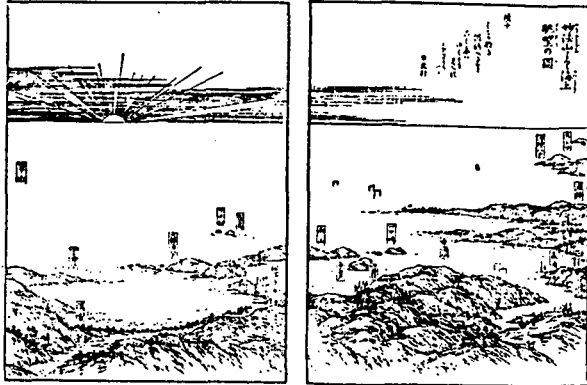


図- 12 望海山型 (妙法山)

5. 水辺のデザイン原則

デザイン・ヴォキャブラリーを分析し、以下のデザイン原則を抽出した。

(1) プロトタイプとしての「浜」の諸機能の洗練、純化、複合

a) アクセスのヴォキャブラリーと水際の空間構成

アクセスのヴォキャブラリーは、水際の空間構成(一列の連続した家並と水際線の間のオープンスペースの有無及びその使い方によって「浜」「前浜」「河岸」「浜通り」「片町」に分けられる)及び空間特性によって表- 1 のように整理することが出来る。

(b) 「浜」の諸機能の純化、洗練・成熟化

表- 1 より、アクセスの型毎に水際空間に要請される共同性や眺望性といった特性は、プロトタイプである浜の持っていた自然性、眺望性や公共性といった特性が(本来の浜はニュートラルなものであった筈だが) 人間とのつきあいの中で、ある機能に特化、純化(複数ある特性を単純なものにする、そのうちの一つを強調する)させ

たり、演出などによって洗練化・成熟化(ある荒削りな特性を磨く)していったものと考えられる。

例えば、河岸や水辺片町はプロトタイプである「浜」の持っている湊の機能を純化させたもの、「浜」と呼ばれる「見通し座敷」は、まさに「浜」の持っている眺望性という特性を洗練させたものといえる。

表- 1 水辺の空間構成及びアクセスの型の関係

型	「打出」	「坂廻」	「浜出」	「突抜河岸」	「小路」「通庭」	
ア ク セ ス						
	方 向	街 道 「自然海岸」	集 落 「町外れ」	集 落 「前浜」	「里」「町」 「河岸」「浜」	通 り 「見通し座敷」
	領域間の連絡	沿岸域→水際空間	臨水域→沿岸域	臨水域→水際空間	臨水域→水際空間	臨水域→水際空間
	利用者	沿岸域移動者	臨水域居住者	臨水域居住者	臨水域居住者	臨水域居住者 (特定/限定)
水 際 空 間	形 態	「浜」	「浜」	「前浜」	「河岸」	「建築占有」 「水辺片町」
	空間特性	・自然性 ・眺望性 ・遊機能 ・公共性	・自然性 ・眺望性 ・遊機能 ・公共性	・自然性 ・眺望性 ・遊機能 ・共同性	・眺望性 (遊機能) ・遊機能 ・共同性	・眺望性 (遊機能) ・私的占有 (共同性) ・公共性

(2) 眺望のデザイン原則

潮見峠型、望海山型では、「見晴らし」の良さが強調される。これに対し、対潮山型では、「見渡せること」が強調されている。

また、見通し座敷型における「見通し」とは、遮るものがなくなって、水面が見える状態を指すと考えられる。

また、潮見坂型、淀看の席型、対潮楼は視点場を操作して水面を生けどっているものである。

従って、眺望については、水面に対する「見晴らし」「見渡し」「見切り」「見通し」の4つの眺望モデルを想定することができ、眺望のデザイン・ヴォキャブラリーは、表- 2 のように、いずれかの眺望モデルに属すると考えらることができる。

表- 2 眺望のデザインと水面に対する眺望モデル

水面に対する眺望モデル	定 義	該当する眺望のヴォキャブラリー	用いられる領域
見晴らし	高さの確保や不可視領域から可視領域への位置の操作等によって、水面に対する可視量を周囲と差別化する	潮見峠型、望海山型	望水域
見渡し	主として水平方向の視界量の広がり確保することによって、水面を一望する	対潮山型、(浜)	臨水域水際空間
見通し	(水面への眺望を阻んでいるものがある状態から)、視野を隔てるものがない状態を得ることによって、開けた視界を楽しむ	見通し座敷、(浜)	水際空間
見切り	地形や植栽、構造物等の視点場近傍のフレーミングにより、透視形態の操作を行い水面を強調する	潮見坂型、淀看の席型、対潮楼	望水域

(3) 公私の重層的な空間による面白さの実現

江戸や大坂のように、特に成熟した水辺空間においては、水面側を建物が物理的に占有する空間構成が顕著に見られた。

そこでは、以下の a) ~ c) が担保されることにより、単なる私的占有でも、単なる公共公開 (open to public) でもない、公私が重層的に存在する、陰影のある豊かな空間が実現される。

現在の open to public という設計思想では得難い水辺の空間整備の可能性を示すものといえよう。(但し、public access の観点からも依然として open to public という設計思想が重要であるのは言うまでもない)

a) 占有を活用した、洗練された空間の演出

見通し座敷のように、水面側は建物に占有されており、通りからは、水面が見えないのに対し、座敷に通されると、見渡す限りの水面を、あたかも自分の庭のように感じることができる劇的な演出方法が発達した。

これは、占有の利点を最大限に活かした、洗練された空間の演出方法であると考えられる。

b) 占有を前提とした空間における公共的空間の確保

水面側が建物に占有されていても、「突抜河岸」のように公的なアクセスが存在していた。また「小路」「通庭」は「公」を補う空間として機能していたと考えられる。このように占有を基調とする空間において「公」を補うための多様な仕組みが共存していた。

c) 私有から公共までの重層的な空間の確保

公的なアクセスといっても、単純なものではなく、「突抜」のように公的なアクセスから「小路」や「通庭」のように利用者が限定される(知っている者しか使えない)アクセスまで、公的なものから私的なものまでが重層的に存在していた。

6. 水辺のデザインの体系

デザイン・ヴォキャブラリーは以下のように体系化することができる。

(1) デザインと「領域」

ヴォキャブラリーは、水辺近傍だけではなく、内陸の領域においても用いられる。その領域を、水辺との関わり合いの度合いに応じて、「臨水域」「望水域」「沿岸域」に分けて考えることができる。

各領域とデザイン・ヴォキャブラリーの関係は次の通り。(図-13)

望水域とは水面に対する可視領域であるが、水面と直接は接しておらず、主として眺望によって(それも意識的に関係付ける手法によって)関係づけられる領域を呼ぶことにする。その領域は「潮見峠」によって確定され、「突抜通り」によって臨水域と接続する。この領域内では、「見晴らし」「見切り」を用いた眺望のデザインが存

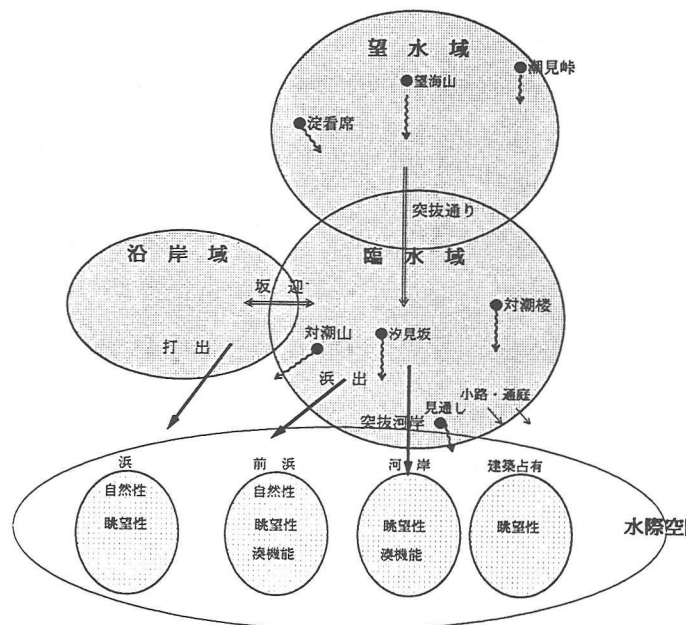


図-13 デザイン・ヴォキャブラリーと領域

在する。

臨水域とは、水面に接し、生活の中で、水辺との関わりが深い領域をものとする。「突抜通り」によって望水域と接続し、「坂迎」によって沿岸域と接する。「突抜河岸」「小路」「通庭」によって、水辺にアクセスする。

この領域内では、「見切り」や「見渡し」の眺望デザインが存在する。

また、水際の空間(エッジ)には、眺望を一端、断絶させた状態から、開けた視界を楽しむ「見通し」の眺望デザインが存在する。

沿岸域とは臨水域と望水域を結ぶ領域をいう。移動者によって認識される空間。「打出」によって水辺へアプローチする。

(2) 「内」「外」の領域感とヴォキャブラリー

a) 「内」「外」の領域感とデザイン・ヴォキャブラリー
「打出(うちいでる)」「浜出(はまいで)」「突抜(つきぬける)」というヴォキャブラリーは、「内(若しくは「裏」)から「外(若しくは「表」)へ出ることを意味しているが、これは内陸を「内(若しくは「裏」)、海側を「外(若しくは「表」)とする空間認識が反映されていると考えられる。

b) 自己領域化の多様な仕組みとしてのデザイン

物理的に水辺を占有するのではなく、「内」にあって、「私」が「外」(水辺)へ意識を投影する(心理的に占有する=自己領域化する)ための多様な仕組みが眺望やアクセスのデザインに他ならない。

8. まとめ及び今後の課題

本研究における成果は以下の通りである。

- ①伝統的な水辺空間における眺望及びアクセスの多様なヴォキャブラリーを抽出した。
- ②アクセスのヴォキャブラリーと水際の空間構成は対応づけて整理でき、それらが、プロトタイプである「浜」の諸機能を純化、洗練したものであることを示した。
- ③眺望のヴォキャブラリーは、透視形態の操作、可視量の操作等から4つの眺望タイプに分けられることを示した。
- ④眺望及びアクセスのデザインは、水辺だけでなく、内陸の領域においても用いられることを示した。
- ⑤眺望及びアクセスのデザインは、海側を外、表、内陸を内、裏とする空間認識を反映したものであることを指摘した。
- ⑥公私の重層的な空間による面白さの実現
伝統的な水辺空間においては、水辺の占有を基調としながら、単なる私的占有でも公共公開でもない、公私が重層的に存在する豊かな空間を実現していることを示した。

⑦伝統的な水辺空間においては、物理的に水辺を占有するばかりでなく、自己領域化の多様な仕組みが見られることを示した。

今後の課題としては、水辺の地形や家屋、町・都市等、対象とする空間の範囲をより広げ、時代による変遷等も考慮しつつ、水辺の空間構成と空間認識の構造について更に明らかにしたいと考えている。

注

*1) 斎藤 3) は潮見峠は、山中における水面の不可視領域と可視領域の接点であり、海面の認識境界であることを指摘している。

参考文献

- 1) 渡辺貴介、水野雅男：港とまちの空間構成上の関連に関する史的研究、日本土木史研究発表会論文集、1985.6
- 2) 竹内滋、渡辺貴介、村田尚生：近世における港町の空間構成に関する研究、日本都市計画学会学術研究論文集、1996
- 3) 斎藤潮：海岸景観及びその体験の典型に関する研究、日本都市計画学会学術研究論文集、1985
- 4) 日本名所風俗図会 全18巻、角川書店、1980

伝統的な水辺空間における眺望及びアクセスのデザイン原則に関する研究

上島顕司，善見政和

現在の水辺の整備は open to public という設計思想で行われているため、均質的な空間を創出しがちである。伝統的な水辺空間に関するデザイン・ヴォキャブラリーの抽出及びデザイン原則の分析を行った結果、伝統的な水辺空間においては、

- ・眺望及びアクセスのデザインは、水辺だけでなく、内陸の各領域においても用いられること。
- ・眺望及びアクセスのデザインは、人々の海側を外、表、内陸を内、裏という認識を反映したものであること。
- ・水辺の占有を基調としながら、公私が重層的に存在する豊かな空間を実現していること。
- ・物理的に水辺を占有するばかりでなく、自己領域化の多様な仕組みが見られること。

を示した。

A study on design principles on the landscape and the access to the waterfront areas in Edo Era

by Kenji UESHIMA, Masakazu YOSHIMI

We have picked up the various vocabularies of the landscape and the access to the waterfront areas in Edo Era.

The conclusions of this study are as follows;

The design vocabularies of the landscape and the access are used not only at waterfront areas but in inland areas.

People recognized the seaside as the outside and the front, the inland as the inside and the back by analyzing the design vocabularies.

In Edo Era waterfront areas consist of the mixtures of public and private spaces.